

古典籍商逸聞

—— 鹿田松雲堂そのほか

山本和明

要旨

古典籍商と蔵書家との交流は、かつて新聞紙面を彩り、多くの人の知るところであった。思い出話として語られたそれらの逸話を紹介し、当時、京阪で実施された古書交換会の様子を探るとともに、実際に古典籍商鹿田松雲堂と交わされたやりとりの一端を、書翰などから確認したい。

はじめに

先号において、枕草子研究で有名な田中重太郎の蔵書家としての一面を確認したが、そうした蔵書家の存在は、かつては多くの人に知られるものであった。研究者のみにではない。古い新聞紙面等を確認すると、時折蔵書家についての記述を確認することが出来る。関東大震災以降においては、焼失した書物群への哀惜の情とともに特集なども組まれていくが、それ以前にも幾つか確認することが出来る。一例として、まずは稀書複製会叢書を刊行した米山堂主人山田清作による談話をとりあげてみたい（※は稿者による註記である）。

珍本も古い所では江戸末期の蜀山人、柳亭種彦、式亭三馬の三人が、通と蔵書の上から云つての三幅対だったやうです。明治に降つては、故大野洒竹氏が珍書交換会で買占を始めてから、珍書の値段が一時に出たもので、それ迄は全く安価なものでした。今東京に一軒しか残つて居ない純江戸式の貸本屋、牛込北町池田屋の先代がまだ存命の頃には、西鶴の好色本が一冊二銭位で手に入つたもので、一時洋画家の長原止永氏が盛んに西鶴本を獵つた頃だつて、一冊一円位の相場でした。けふ日は五百円出しても一寸見当りませうまい。近年富豪岩崎（※岩崎久弥）や久原（※久原房之助）が故和田維四郎氏（※和田雪村）の手を経て沢山買ひ込んで品払底を来してゐるからです。

珍本と言つても愛蔵家と研究家との二方面に分れるが、東京第一の愛蔵家は、何と云つても林若吉氏でせう。氏は稚い時から体が弱かつた為め、夙に珍本の蒐集に従事した人で、先頃三十円で手に入れた一切支丹秘密出

版物」など正しく珍品に違ひありません。氏はその他に落語、講談本、歌留多、曆等まで蒐めてゐるが、近くは外国物にまで手を展げるさうです。

演劇ものでは安田善之助氏が蒐集に係つた「松廼舎文庫」が最も著名で、それには「役者評判記」等も全部揃つてゐる筈です。黄表紙ものでは株式仲買の加賀豊三郎氏、火事に関係した珍書は帝国海上保険会社の村瀬春雄博士、浄瑠璃本では小児科医の樋口芳太郎氏、遊里ものでは千葉鉞藏氏が孰れも知名の蒐集家です。尤も各方面に亘つて数量の多い事では、黒川真道氏が第一でせう。これは春村、真頼、真道の三代に亘つて輯めて来たものだからです。大阪では山口銀行の山口吉郎兵衛氏、その他永田好三郎（※永田有翠）、渡邊霞亭の両氏が蒐集家として有名で、殊に霞亭氏所蔵の「浮世草紙」だけでも優に一大目録が出来る程です。京都では指を小山源吉氏（※小山源治の誤り）に屈すべきでせうか。

蔵書家でもあらうが寧ろ研究家として通つてゐる人には、故人で大槻如電、幸堂得知、宮崎三味の三氏、現存では幸田露伴、同成友、饗庭篁村、淡島寒月、松居松葉、久保田米斎、巖谷小波、鏑木清方、山村耕花、土肥慶藏、永井荷風、高野斑山（※高野辰之）、藤村作、市島謙吉、水谷不倒、宮田修、田中萃一郎、神田乃武、三浦新七、市川左団次、同三升、同猿之助等の学者文人画家俳優等が聞えてゐます。（談）

（「珍本蒐集家に就ての話」読売新聞大正十年三月二十八日朝刊）

稀書複製会叢書は、諸家珍藏の書冊を複製しており、それは多くの愛蔵家・研究者との繋がりがゆえになされた事業でもあつた。稀書複製会発足当時、大正七年十一月十七日に東京不忍池畔の生池院（弁天堂）にて開かれた稀書展覧会には諸家珍藏の図書約二百五十点が展覧されたが、その目録『諸家珍藏／稀書解題』（大正八年二月二十五日発行、

米山堂）に拠れば、先の紙面にも確認できた画家の鏗木清方などは、『浪花侠客絵尽（仮外題）』半紙本一冊、『絵本春の錦』半紙本二冊、『絵本四季花』半紙本二冊を出品している。稀書の値段が高騰しつつあった大正時代に、「近年富豪岩崎や久原が故和田維四郎氏の手を経て沢山買ひ込んで品払底を来してゐ」たとあるが、新聞紙面にそうした愛書家のことが語られるということは、「市場」として成立していたことを意味しよう。

デジタル化の進んだ現在、古書などの価格はいまや暴落に近いものがある。床の間を持たなくなった家の構造の変化が、茶掛けなどの掛軸を不用なモノとし、嵩張る文学全集などは二束三文といつて良いほどの状態にある。WEB上でオークションが開催されるなど、個人で出品売買が出来るようになって、そのことは加速しているように思う。

明治時代にも、同様に和本の価格暴落が起こっていた。活版印刷が普及し、その分量を軽減出来、限られたスペースに収まること、洋装本という体裁ゆえに書物を縦置きに配架が可能となり、背題によつて書物が容易に確認できるようにになると、それまでの和本は退場するしかなかった。反古同前に捨てられ、焼かれていったのである。そうした状況の証言者の一人である上方の古典籍商鹿田松雲堂鹿田静七については、上方文庫三九『なにわ古書肆 鹿田松雲堂五代のあゆみ』（和泉書院、平成二十四年十一月刊、四元弥寿著、柏木隆雄・飯倉洋一・山本和明・山本はるみ・四元大計視編）で、翻刻や解題作成に携わったことがある。そこに残された資料からは、当時の受難状況とともに、それでも古き書物に傾注した多くの愛書家との交流の程が窺える。いま本書に収録されていない三代鹿田静七の談話によつて、当時の様子を窺うことにしよう（以下、引用文に関しては、適宜改行等を施し、注記等を取捨選択するなど構成を整えている）。少々長い引用はお許しいただきたい。こうした論考において、引用する資料本文こそが「時代」の証言であり、下手な解釈をするよりは、資料が物語ってくれるはずだという思いからである。

三代目鹿田静七（餘霞）懐旧談

明治二十年前後と申しますと所謂西洋文明の謳歌時代で、何から何まで開化騒ぎの時勢だったので、古書林界にとつては、正に空前の受難時代でした。こうした時代だったので、誰しも和本・唐本など顧る者もなく、京阪から四国、中国にかけての神社、仏閣、公卿、武家に古くから伝つてゐた幾多の古書は続々市場に流れ出たのでした。勿論これらの中には反古同然に焼捨てられ、永久にこの世から消去つてしまつた貴重な文献も多々あつた事でせう。また幸ひに紙屑問屋の屑の山からセドリ屋の手に拾出されて市場に蘇つたものもありましたらうが。とにかく之等の古書は一時に京阪の古本市場へ流出して来たのでした。

丁度その頃、不肖私共の先代（二代目鹿田静七氏当時四十五歳）は古書の散逸を恐れまして、その回収を計るとともに、維新後では初めての古書籍目録『書籍月報』を創刊（明治二十三年五月五日）しまして市価の安定を計りました。その創刊号巻頭言の一節に「近來風化の沿革、事物の日新に際し、古典の尚ぶべき、人或は之を忘る。蟹字横文字固より文明なり。韋編緇帙、独り風化の妨げならんや」といふやうな事が書いてあります。西洋文明万能に厄されて四苦八転の受難時代にあつた当時の我古典の受難相の一面をよく物語つてゐると思ひます。

こうした時世だったので、読書子は読書子でひたすら新刊書にのみ走り、古書などに注目する者は極めて稀で、今日千金を投じて尚ほ手に入れ難い珍籍稀書が二束三文、紙屑同様の値で屑屋に払下げられたり、また或種のものは外人に買占められて、わが古典古書の散逸したことは当時まことに夥しいことであつたと聞いて居り

ます。それも、我等がたとへ短年月とは云へ、祖先の遺棄を閑却忘却したからではありませんまいか。

其一例として今尚ほ私共の記憶に残つてゐますのは、当時駐日支那公使をされてゐた黎庶昌及び書記官楊宇敬両氏の唐本漢籍の買占めで、両氏は共に学識も深く且つ唐本の鑑識にも明るかつたので、支那本国にも珍らしいと云はれる稀書珍籍を大いに買ひあつめ、我国に伝はる好いものゝ殆んど全部を母国へ買戻されたことですから、まことに我国にとつては掛けがへの無い大損失でしたが、支那にとつては何よりの慶びで御座いましたらう。

その頃（明治廿年前後）、大阪の書林開成館（三木佐助氏）が内地ではどうにも商売にならないといふので、二束三文で買ひ蒐めた多くの漢籍唐本を支那本国に逆輸出して巨利を収めたこともありませう。その後唐本熱の再燃するに及んで、再び我国にかへつて来た書物も数々ありますが、当時文求堂の先代と私共の先代が二人して北京の古本市場に向つてゐた頃は、よく昔馴染の唐本を見つけては日本に持ち帰つたと聞いてゐます。

何はともあれ、その頃は天下の珍書も紙屑同様の扱ひを受けてゐました。以下少しく価格の変遷について述べて見ませう。光悦本といへば、古来一番美術的なものとして今日珍書中の珍書として同好の垂涎するものですが、当時（明治二十三年頃）この謠本百冊揃ひが二十円で売買されました。明治三十八年山城屋（稲田政吉）さんに弊店から売つた時が五十円。今日は一冊三十五円から五十円もする事を思へば、僅か二十年間に於ける価格の変動は実に激しいものです。

明治二十三年九月、弊店発行の『書籍月報』によると、嵯峨本雲母紙摺りの『つれづれ』が二冊揃ひで一円二十銭でしたが、その後大正五年和田雪村さんが京都で此本を手に入れた時は千円を超えてゐました。

西鶴本で思ひ出すのは、山陰の名温泉城崎の貸本屋中屋甚右衛門の蔵書売払ひの時のことです（明治三十八年三月）。中屋は当時名古屋の大惣（大野惣兵衛）と共に知られた大貸本屋でしたが、時世の推移で商売が成り

立たず廃業（明治三十三年廃業）しましたが、さすがは湯治客相手の貸本屋だけに好色本を始め八文字屋本、音曲本、芝居本、浄瑠璃本など、わけでも西鶴の好色本は逸品を網羅していましたが、今日千金を投じて尚ほ得難い之等の好色本がその時は高いといつても十円と超しませんでした。

西鶴本の話をもう一つ。これは明治二十三年頃の前回に申した古書受難時代のお話ですが、大阪の或紙屑問屋に中国筋から持込まれた紙屑の山の中から、『好色五人女』の揃ひがひよつくり出て来たので、之を見つけたセドリ屋が早速引抜いて値踏みをしたところ、屑屋のおやぢが面倒臭がつて、そんなに欲しいなら紙屑の山ごと一緒に買ったら何うだと難癖をつけ、其儘お流れになつてしまひました。勿論紙屑ごと買ったところで一円か一円五十銭位のものでしたのです。

西鶴本はこれ位にして次は金平本の珍話を一つ。これはズツト降つて明治四十年頃です。大阪の東区淡路町の質屋浜和助さん、いゝ年輩の老主人で、店番をしながらぼつりぼつりと古書をひもどくのを何よりの楽しみとしてゐましたが、大冊物から一、二冊のものに至るまで素晴らしい珍書の数々を秘蔵して居られましたが、或る晩私は水谷不倒さんと御一緒に、すぐ横丁の御霊神社みたまの夜見世で、時々軟派ものを掘出してくる古本の露店へ参りました。すると主人の話に、つい先刻一老人に十二冊物の金平本を売つたと聞き、早速その足で不倒さんと一緒に質屋の浜さんのお宅を訪ねましたところ、案の定、素晴らしい金平本を買つて帰つた所でした。

その金平本は題簽付の元表紙のウブな本で、浜さんその時一冊三十銭宛だかで買はれたさうでしたが、其後（四十三年頃）古書交換会五周年記念の展覧会では、この金平を私は百六円を奮発して落札しましたが、浜さんは余りの高値に驚かれてゐました。其後二年ほどして百五十円で渡邊霞亭さんにお譲りいたし、先年霞亭さんがお逝くなりになつた時の蔵書売立にはあれが確か三千円だかで東京の某図書館に落ちました。

浜さんは其後間もなく逝くなられましたが、その時の遺言に、近かしい友人の中に平素から自分の蔵書中欲しいものがある方があれば、一部づゝ頒けて上げて呉れといふ事でしたので、灰屋紹益の自筆本や『両花道』（西鶴の俳書 ※未詳）を貰った人もありました。残本は友人同志で入札しました。又今富岡謙三氏（故富岡鉄斎翁の令息）が秘蔵されてゐる元和活字本の『破テウス』は此時同氏が落札された物です。

古板地誌の類もその頃から見るとずる分騰貴したものです。『京童』『江戸雀』などもその頃はたやすく手に入りましたが、明治四十五年頃でしたか、『奈良名所八重桜』が五十円だかで外骨先生に納まり、先生が東京に移られる時の売立には百五十円で再び弊店に返り、それから霞亭さんの手に渡り、霞亭さんの歿後の入札には、私も永の親しみある本だったので三千円で入札しましたが、二百円の差で東京の村口さん（※村口書房初代主人村口半次郎）に落ちました。

何にもかもがこんなに暴騰したわけではありませんが、先年（大正十年九月）歿くなられた永田有翠（鴻池銀行重役の令息）さんは子孫のためには美田よりも金銭よりも、書籍を買ひ遺すべきだなど云はれたものでしたが、それだけあつて氏の遺された永田文庫は、二十坪ほどの蔵に階下階上ともぎつしりでした。其後数回に亘つての入札高は、恐らく美田よりも莫大な額だつたでせう。

（鹿田静七談「紙魚の跡 滲尽しの巻」読売新聞昭和三年八月二十九、三十、三十一日条）

浜和助や水谷不倒、永田有翠、渡邊霞亭、和田維四郎と錚々たる愛書家たちが登場する。鹿田松雲堂と古書愛好家たちとの交流については、拙稿で以前概観したことがある（「鹿田松雲堂というサロン―稀書翫味の交遊圏（二）」相愛大学研究論集二九卷、二〇一三年）。国文研にもその鹿田松雲堂に関連する資料が一点收藏される。『大阪書田会／近

世初期名作標本集』 (<https://doi.org/10.20730/200015614>) がそれである。内容は、刊行された版本から書物の標本を作るように、一枚づつ貼られたアルバムのようなもの。「明治四十五年五月撰」と記されており、明治末年の製作物であった。「書田会記録」（個人蔵）という文書に拠れば、この会には幸田成友や加賀豊三郎、永田有翠、西村天囚、水落露石、鹿田餘齋といった面々が集うており、古書談義とともに、会員各自が持ち寄った秘蔵珍本の端本を分かち、本の標本を作るという趣向で、明治四十三年三月から九回にわたり開催された（拙稿「古典籍を標本する」参照。 <https://www.nijl.ac.jp/search-find/img/375.pdf>）。鹿田松雲堂に集う多くの愛書家とともにこうした会、すなわち交換会であり、展示会が企画され行われていたのであった。交換会の全貌はまだまだ判らぬことが多い。

古書交換会の日々

こうした古書交換会の実態について、水谷不倒「大阪の古書交換会」(『明治大正古書価之研究』駿南社、昭和八年一月刊) に詳しく述べられている。水谷不倒が『明治大正古書価之研究』を執筆する際、鹿田松雲堂が発行していた古書目録『書籍月報』を主な資料として活用していたのは有名な話である。あるいは鹿田松雲堂の取りまとめた記録類も参照しただろう。以下、その一部を抄録する。

大阪の古書交換会は、明治三十七年七月九日、南久宝寺町堺筋西へ入、水落露石君の別邸で開いたのが始めてある。多分東京の珍書交換会を学んだものであらうと思ふが、其頃は私は大阪にゐた為、東京の事はよくは知らぬ。当日の幹事は幸田成友、水落両君であつた。其時の通知書には、

一、本会は書籍の交換を主とし書画翫弄品も亦可なる事

一、交換の方法は先づ各自出品を陳列し次で入札に附する事

一、交換品を持参せざる者は入札の権なき事

一、落札品其他の授受は即日其席に於て為す事

一、会費を要せざる事

といふやうな事が記してあつた。集まつた人は幸田成友、水落露石、浜和助、内藤湖南、富岡謙三、鹿田静七、永田有翠、水谷不倒、小山田松翠、他二名であつた。入札の方法は、品物に入札箱を添えて廻す、之を一見して入札して次へ次へ廻す、東京の腕伏せの方法とは少し違ふ。鹿田君が開札、水落君が書記役を勤め、最初であるから、勝手が分らず、狼狽しては笑の種を蒔き、あちこちから口を出す。本の交換よりも、贅弁のとりやうで大騒ぎ、頗る愉快な会であつた。（略）併し大阪の交換会は書物に対する熱度は左まで強からず、寧ろ同好者が一堂に集つて遊ぶのが主意であつたから、高価なものなどは、相手にするもの殆んどなく、従つて珍書は余り出なかつたが、同三十七年十一月廿三日、京都新島丸高安月郊君の宅で第七回を開催した時、出席者、大阪は水落、永田、予三人ぎり、鹿田も差支があつて行かなかつたが、京都側は地元だけに、高安月郊、小山杜口（※小山暁杜の誤り、源治）、杉浦三郎兵衛（※杉浦丘園）、岡本橋仙、碓井小三郎、山口福太郎、若林茂助、山田茂助の諸氏で、なか／＼の盛会、又出品も多かつた（略）

各々の交換会には井会・書田会・保古会などと名前が付けられており、概ね似たような規則のもとで行われていたと目される。ここでは、当時の大阪での古書交換会の様子を窺い知る上で、別の証言として、大阪の古書肆だるまや主

人木村助次郎の談話を紹介しておきたい。木村助次郎は大阪の朝日ビル販売係から、明治四十年に長年蒐集してきた芝居本、浄瑠璃本を基に古本屋を開業した人物である。大正十三年に当時の地誌流行を受けて古版地誌刊行会を主宰し、『名所絵入 難波鑑』の復刻などを手がけている。

明治三十二年幸田成友さん（露伴先生の令息^{マツ}）が大阪史誌編纂のため下阪された頃は、京阪の古書蒐集家相互の親睦を計るといつた何等の会もなかつたし、又この地の蒐集家の通癖として珍書秘蔵のあまり、親友以外の他人には減多に見せないといふ——この癖は今尚残つてゐる——云はゞ蔵書の門外不出を当然と心得てゐたので、幸田さんの資料蒐集上の仕事は予想外の困難に陥つてしまつた。

時あたかも東京では既に交換会が組織され益々活躍の緒にあつたので、やうやく京阪でもこの議が持ち上り（明治卅三年）、鹿田の肝入りで集る者永田有翠、水落露石、浜真砂のお歴々をはじめなか／＼の盛況だつた。勿論幸田さんの下阪が動機となつた事は云ふまでもない。東京の交換会が素人三分玄人七分といふのに対し、大阪のこの時の顔振れは逆に大部分は素人の蒐集家だつた。

それに丁度宮武外骨先生も下阪されてゐたところだつたので、この会は一層賑ひ、ここに年来孤立してゐた京阪の同好人士が始めて一堂に会し、各自の自慢話に花を咲かせたものだつた。その後この会に馳せ参ずる人も次第に殖へて、五周年記念の大展覧会を催した頃は、高安六郎、高安月郊、中井浩水、湯浅半月、木崎好尚、磯野秋緒など、京都からは杉浦丘園、岡本猶吉、小山源次（治）、西村天囚の諸豪を新たに迎へ空前の盛況を示したが、明治四十年、浜、水落の両雄相逝き、外骨先生又東京に帰られたので一時に中心人物を三人まで失つたこの会は、次第に衰へて間もなく中止の止むなきに至つた。今日南木芳太郎、青木七平氏等によつて組織され

てゐる「古書趣味の会」は（大阪市東区安土町四丁目、鹿田松雲堂方）、この交換会の後身をなすものである。

話は後へ戻つて、五周年記念展覧会当時の、云はゞ交換会全盛時代の思ひ出ばなしを二三申し上げよう。この時の会場は鹿田の向側の書籍集会所、集まる者は前にも申し上げた当時粒選りの蒐集家連、商売人側は鹿田と私、何しろ交換会ではなく、展覧会だといふので各自が自慢の秘蔵本を持ちよつたのだから実に素晴らしいものばかりだつた。結局閉会間際になつて二三の即売を余興にやつたが、先日「濤尽しの巻」（※本論冒頭引用）で御承知の浜氏出品の「金平本」が鹿田の手に、水落氏出品のお伽草紙「奈良絵」が加賀豊三郎氏へ落ちてその日の会は盛會裡に閉ぢたのであつた。

この交換会にはあまり顔出ししなかつたが、その頃堀江町には小栗仁平さん（明治四十年五十五歳で死歿）といふ変つた蒐集家がゐた。芸者屋油屋の番頭さんで、幸田成友さんとは特に親交が厚かつたやうだつた。蔵書印が又「女商人番頭」といふ風変りなものだつたが、この人はなか／＼珍書蒐集家で、わけても何処かの夜見世で見つけて来たといふ、西沢一鳳の『伝奇作書』（二十一冊）などは唯一の完本として、その後吉川弘文館で国書刊行会の発刊の際も、諸方を尋ねたが定本が見当たらないので、とう／＼小栗氏のものをご台本にしたさうだつた。只今は確か三河国西尾町の岩瀬文庫に秘蔵されてゐるといふ。

（木村助次郎談「交換会の思出」抄・読売新聞昭和三年九月十八日、二十日条）

業者ならば、どの顧客の処に収まつたかといふことは明らかにしないのが通例であるが、こうした発言を見ると、オーブンな情報交換がなされていたやうで微笑ましい。この一文に登場する小栗仁平は大阪の花街堀江のお茶屋の番頭で、大坂ものの軟派類、芝居や遊里に関する蒐集家であつた。のちに書物雑誌の小売業に転じている。小栗については、

幸田成友「小栗仁平氏」(『凡人の半生』共立書房、昭和二三年、DOI: 10.11501/1043634)がその人となり伝えてやまない。原本未見ながら、「西尾市岩瀬文庫古典籍書誌DB」(<https://rc-adeac.trc.co.jp/WJ11C0/WJ1S02U/2321315100>)の解説に従えば、現在『伝奇作書』自筆清書本が同文庫に収蔵される。その解説には「追加の巻末に大阪の古書肆鹿田松雲堂の墨書書簡の巻紙を貼付」とある。その全文を引用し掲載しておく。

伝奇作書(西沢文庫)義は『大阪名家著述目録』(大阪府立図書館刊)之巻首に写真版にて掲載有之候。小栗仁平氏之旧蔵本に御座候。幸田学士の説にては此書手稿本中の最完本の趣に候。国書刊行会本刊行の節は、本書まだ世に現れず。為に該書序文水谷氏の説にも七編ある内、追加之一編無之よし記し有之候が、今この書は全部七編共二十一冊完本にて尤も珍とすべきものと奉存候。／大正五年一月卅日／松雲書堂 餘霞(朱方印「松雲堂」)

西尾出身の実業家岩瀬弥助によって設立された私立図書館岩瀬文庫収蔵にあたり、鹿田松雲堂が仲介していたことになろう。

先の水谷不倒の文章や木村助次郎の一文などをみても、交換会は京阪の愛書家たちが集い、鹿田松雲堂や書籍集会所にて行われていたようである。「京都新鳥丸高安月郊君の宅」で行われたという京都での書籍交換会の様子については、なかなか伺い知ることができないが、これはどうやら京都での交換会と合同での開催であったと目される。ここで京の粋な大旦那、文人墨客の定宿京都三条の萬屋旅館主人岡本橋仙(猶吉)の談話を紹介する。岡本橋仙については、森田清之助『光悦談叢 一名鷹峰叢談』(芸艸堂、大正九年 DOI: 10.11501/927146)に「風流亭主 岡本橋仙氏」

として紹介されており、その人となりを知るよすがとなろう。

京都に書物交換会が出来たのは明治三十二年で、それから十年程続きました。会員の大部分は同好の方々でしたが本屋の主人も二三加はり、月一回寄り合つて入札の方法で書物の交換を致しました。今から思ふと随分愉快な集りで、水落露石君や永田有翠君などはわざ／＼大阪から毎会出席されるといふ熱心さでした。時には京阪聯合で開いたこともありました。

最初の会合は新烏丸の高安月郊君のお宅で催しました。各自が自慢の逸品を持ち寄つたので素晴らしいものばかりでした。私は丁度手に入れたばかりの百冊揃ひの光悦謡本、然も観世黒雪自筆の「大原御幸」が一冊ついてゐるといふ自信のあるものを出品いたしました。ところが開札の結果、高札が僅十六円。無論手離しませんでした。その後露石君から達ての懇望に、原価の二十円でお譲りしました。又今尚秘蔵されてゐる小山源次（治）君の『高屏風くだ物語』（山東京山書入本、上下二冊）の高札が六円五十銭といふ、先づ当時の相場はこれ位なものだつたのです。

その後月郊君が東京に引移られるについて蔵書の処分された時、『二代女』が二十円だから本屋の手に落ちたことを覚えてゐます。今日大金を投じてこの種のを購められてゐる方々には、一寸ほんとうとはお聴き取れないでせう。

やはりその頃の話です（明治卅一年頃）。名古屋の有名な貸本屋大惣（大野惣兵衛）の持本全部の引受方を、当時名古屋にゐた私の親友で金持の若隠居某から相談を受けました。全部で千二百円とかいふ事でしたが、何分その頃の私は道楽盛りで、なか／＼本ばかりにも手が延びず、そうこうしてゐるうちに東京の本屋に取られ

てしまひました。そんなわけで本も見ず仕舞ひでしたが、当時大惣と云へば大した貸本屋でしたから、さぞ素晴らしいもの揃ひだつたでせう。

京都東本願寺の蔵書の一部が入札に出たのは明治四十年でした。さすがは名門だけあつて、いゝ本が沢山ありましたが、この時は玄人筋が聯合して素人には一切落させないといふ手段に出たので、上へくと廻られ、買ふにも全く手出しが出来ませんでした。若林（※若林春和堂）が落札した鎌倉時代の万葉集など全く素晴らしいもので、その後千円だかで佐々木信綱さんに渡つたといふ話です。

（岡本猶吉談「軟派一夕話」抄・読売新聞昭和三年九月二十二日条）

ちなみに、本文にある小山源治秘蔵の『高屏風くだ物語』（山東京山書入本、菱川師宣画上下二冊）は、そのうち非売品ではあるが、大正四年七月に旧蔵者山東京山の附記自筆模刻を掲載した活版印刷本が作成されている（発行所佐々木文具店華月文庫）。複製の奥書には「蔵書 小山晁杜」とあり、小山源治収蔵であつたことがわかる。こうした複製がなされることは、所蔵者自身が公にしたいという以外では、古籍交換会などでその典籍を披瀝し、それを観た人々が複製を願うことが不可欠であろう。古籍籍の複製出版がなぜなされるかと言う点にこうした交換会や展覧会で多くの目に触れることが重要であつたことの証左と言えるのかも知れない。小山晁杜（源治）は京都河原町の素封家で、洗練された趣味人であり、絵馬蒐集家、蔵書家として知られていた。京都博物館員、京都集古会設立者でもある。また、上田秋成崇拜者で、真筆の蒐集で有名であつた。旧蔵本は京都大学附属図書館、天理図書館に多く収まる。

宛書翰などにみる鹿田松雲堂

再び鹿田松雲堂の話に戻る。こうした愛書家と古典籍商である鹿田との交流については、現在整理中である鹿田松雲堂関連資料群によって、今後いま少し詳細に明らかにされていくことだろう。鹿田松雲堂は昭和二十四年を以て五代鹿田静七こと章太郎によって店を閉じられたが、章太郎は永く松雲堂関係資料の保存保管に勤めた。章太郎歿後、章太郎の姉四元弥寿に引き継がれ、資料の保管とともに、和泉書院刊行のもととなった「鹿田松雲堂五代のあゆみ」が弥寿の手で記されたのであった。平成十七年に大阪府立中之島図書館において開催された「近代大阪の耀き―古書肆・鹿田松雲堂と大阪の雅人文人たち―」展には、その保管された資料が多く出品されている。和泉書院『なにわ古書肆 鹿田松雲堂五代のあゆみ』刊行後、その文化的資料価値を鑑み、寄贈されることが決まり、その受入に必要となる詳細な書目リストが、大阪大学大学院文学研究科国文学・東洋文学講座（多くの大学院生が参加）が中心となって作成されている。保管先に赴いての数年に及ぶ調査で、ほぼその全貌が見えてきたが、今般の新型コロナ禍等もあって、調査もままならず、なかなか完了とまでは至っていないようである。稿者も東京在住のため調査に参加はできなかったが、少し関与したこともあり、その資料のなから少し紹介をすることで責を塞ぎたい。

「本家より暖簾分けをしてもら別家することになったのは、天保十四年卯閏九月十八日、清七（※初代）三十一歳の時でした」という四元弥寿の記述がある（『なにわ古書肆 鹿田松雲堂五代のあゆみ』）。初代松雲堂鹿田清七は河内屋清七より改名。一花堂山水の戲号で戯作もものしている人物であるが、弥寿の記述に拠れば、河内屋新次郎（岡田積小館）に少年時代から奉公し修行していたという。単行本とした際に何よりも収録すべきであったこの記述の証

左となる資料が、調査の中で確認できた。それは「別家証文之事」の写し（仮目録番号513-3-3）であり、以下、翻刻をしておきたい。この証文により、文政十三年から河内屋新次郎方で奉公していたことが確認できる。

別家証文之事 写

一、私義去る文政十三年寅年より当卯年迄十四ヶ年御奉公相勤申候に付、此度別家被仰付、忝仕合奉存候。依之為御賜附本屋商売にて、別宅并に別昏御目録之通り被下候。忝幾久敷受納仕候。然る上は自今仕候、從御公儀様被為仰付候御法度之義、些相守申候。勿論本屋申合通、些相守商売可仕候。猶又御得意諸方、御仕送り先、其外御家へ対し少しにてても妨成義、一切仕間敷候。且其御家に御用向之節、如何様之義有之候共、早速出勤可仕候。尚後年に至り候とも、子孫永く何事に不寄御家御差図之義、違背申間敷候。其外万端我儘之取斗仕間敷候。

一、御本家并に御暖簾内、差障り之義致間敷、且又御申合承知仕、相守可申候。為後日、仍而別家証文如件。

天保十四年卯閏九月

河内屋清七

御主人様

右本書之通承知仕候。右清七相続之義に付、其元殿御差図次第諸親類中より聊違背勝手ケ間敷義、一切申間敷候。為其奥印如件。

天保十四年卯閏九月

本人親 志方屋清五郎

河内屋新次郎殿

このような資料（文書）は一点一点を確認していけばまだまだ見いだせるであろう。古書交換会に關して言えば、書

田会資料や保古会資料を含め、多くの資料も残されている。とりわけ鹿田静七宛書翰は数多く残されている。中には卷子仕立に装幀されたものもあるが、それは今後調査にあたった他の研究者たちに委ねたいと思う。顧客とのやりとりはあるいはすべて残されていたのではなかったろうか。一括りに纏められた複数枚の束に残された書翰類からは、井上円了、富岡鉄斎、岸田吟香など多くの愛書家たちとのやりとりが確認出来る。古典籍商だから、その多くは注文のそれであるが、なかには注文とは別に興味深いものもある。たとえば、古絵巻・古筆の第一人者で「平家納経」など平安朝美術を中心に文化財の摸本製作でも著名な田中親美の書簡（仮目録番号587-216）などは、昭和四年十一月二十一日消印の封書に認められており、初めての鹿田に宛てた書翰ながら、注文ではなく教えを乞うものであった。「小生事昨今嵯峨本の調査に従事いたしをり、目下奉職中の東京帝国大学図書館所蔵の嵯峨本を初め、東京在住蔵書家を歴訪して漸く別帙記載の分だけは之を見ることを得申候も、猶小生の今日まで見ることを得ざるもの少くも数種は有之候はんと存じ、其後も精々心掛をる次第に有之候」と、自己紹介として自身が嵯峨本調査を行っていることを語る。京阪に嵯峨本は多く残存していると聞き及び、鹿田でも多く取り扱ってきたと考え、「別帙記載の有無に拘らず貴地在住の御方に嵯峨本所蔵者無之候や。只今貴家に御所蔵のもの無之候や」と訊ね、助力を請うているのだ。また「猶嵯峨本は御承知の如く同じ源氏物語にも普通紙刷と五色紙刷との二種有之、徒然草の如きも普通紙刷一種のみと存じをりしに、此頃内閣文庫所蔵のものを見れば模様紙刷にて普通紙刷とは文字にも相違あり全く異板なることを知り申候など此類の事他の嵯峨本にも可有之かと存候。是等の点に付ても御教示に預り度と存候」と記す。文中記載の別帙には「嵯峨本 小生閲見の分」として「謡曲百番／古今和歌集／伊勢物語／三十六歌仙／伊勢物語首聞抄／平家物語／方丈記／徒然草／源氏物語／能 花伝書／久世舞／刀剣銘画／保元物語／平治物語／撰集抄／十二段草子／扇草子」が記載される。

誌面の都合もあり、こうした書翰を二点翻刻して、この稿を終えることにしたい。一点目は、有賀長隣あるがちやうりんによる明治二十九年二月十九日付消印のある鹿田静七宛封書である（仮目録番号587-348）。有賀長隣は文政元年生、明治三十九年歿。古今伝授を家学として、代々継承してきた有賀家五代目の当主であり、上方における地下歌人の指導者であった。管宗次「有賀長隣 種痘活動を助けた旧派名門歌人」（上方文庫二〇『関西黎明期の群像』、和泉書院、二〇〇〇年刊）に詳しい。今回翻刻する書面からは、短冊潤筆料を巡って京阪で取り決めがなされていたことなどを窺い知ることが出来、興味深い。二点目（最後）はこれまでも登場した水谷不倒からの書翰である（仮目録番号587-170）。消印が不鮮明でありひとまず大正十五年三月としておくが、一連の書翰は、西鶴『好色一代男』を巡るやりとりであるが、駆け引きがあり興味深い。三通から成っている。

〔有賀長隣書簡 明治二十九年二月十九日付〕【写真1】

余寒絶候弥御壯健大賀に候。陳者本山彦一と申御方より短冊御所望とて御遣しの五葉、認ては書候へども、追々手ふるひ甚見苦しく候。よろしく御断申上候。潤筆料の事、牧野氏へ御任せの由に御座候へ共、同主は暮しに未不案内と存候故、直々申上候方宜敷と存、左に委細申上候。

佐々木弘綱

鈴木重嶺

有賀長隣

此地にては右三家、師匠家にて歌を家業とする家也。此外に高名なる学者生のあれども夫は別也。又新米の大天狗にて、師匠も何もかもする人沢山あり。然るに先年右佐々木老人より、打寄相談にて内決同意致し度とて

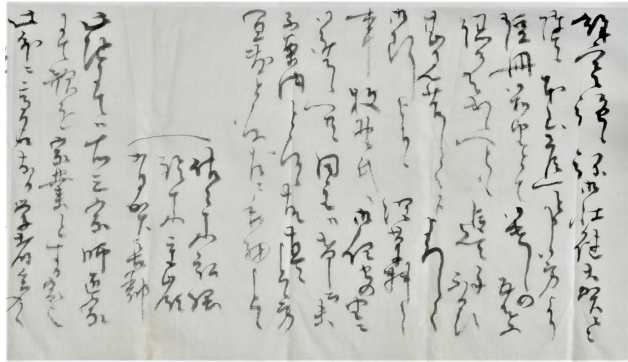


写真1 鹿田静七宛有賀長鄰書簡

申され候に、短冊五十枚もかゝして金三十錢菓子料として送る人あり。右にては家業立行不申候故、四季四枚を金五十錢と定めたとしと申事故、種々と相談ありて、つゞきは四枚五十錢と相成候へ共、野老は数代の歌人なれども、東京へ出し候は昨今の事故、四季祝五枚を金半円と致可申と申度候事に候。しかし夫に定め候事にも無之、都而右辺の謝礼と申ものは、其ちからより出候ものにて、極めると申事はなき物と存候へ共、其相談一決同意と申事故、右に受取候。此意よくく貴君御会にて然様御取計被下候。其節はなしに、先年佐々木弘綱ぬし大阪人に聞しとはなしに、大坂天王寺辺に熊谷直好と申歌人あり。此人短冊持てくれば百枚にても二百枚にてもかきて遣す人故、其社の幹事、夫にては家業たゝぬとて、玄関へ短冊潤筆老枚壱両とかきて出したる所、其後いづくの人か来りて、壱両だして短冊を乞候故、直に認て出されしに、よみて見て又壱両出して、此度は色紙をといふゆへ、色紙をかきて出されし処、よみてみて右

短冊と色紙をあわせて、はなをかみ、玄関に捨置帰りしと也。右にて大笑ひし候。都而こんなものにて、其位力ともしんこうとにある事なり。米薪の如く相場の直段の極まる物ならず。只々返却希候。右佐々木師残念に死す。其子息信綱は評判よし、人には申し添候。

十九日 長鄰

静七君

合点したらば御書中へ。

【水谷不倒へん書き書簡】【写真2】

① 拝復いよへ御快復奉賀候。『一代男』欠本御入手之趣、羨望の至りに候。当方にも同欠本四冊あり。都合によりては申受けてもよろしく候。当方は一、二、四、五の巻にて、貴方一、四欠本なれば、揃ひ可申候。当時品少

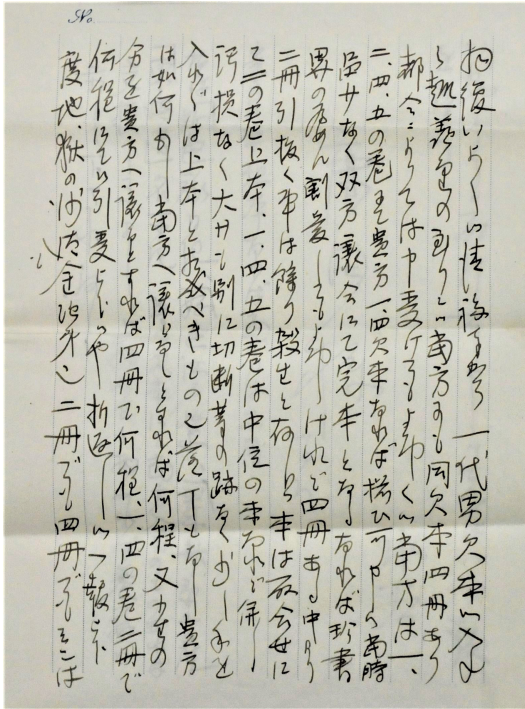


写真2 鹿田静七宛水谷不倒書簡

なく双方譲合にて完本となるなれば、珍書界の為に割愛してもよろしけれど、四冊ある中より二冊引抜く事は餘り殺生と存上候。本は取合せにて、一、二の巻上本、一、四、五の巻は中位の本なれど、併し汚損なく、大きさも別に切断等の跡なく、少し手を入れずは上本と相成べきもの也。落丁もなし。貴方は如何。もし当方へ譲らるゝとすれば何程。又小生の分を貴方へ譲るとすれば四冊で何程。一、四の巻二

冊で何程にて御引受被下候や。折返し御一報被下度、地獄の沙汰も金次第也。二冊でも四冊でもそこはいかやうとも取計可申候。先は御一報を待つ。 水谷

鹿田様 事下

貴方の本、祖本なれば、当方は不用。

なほ『好色旅日記』『好色江戸紫』『出来齋京土産』『東海道名所記』等の欠本にて、当方入用のものあれば交換してもよし。御持合せ候物あれば、巻数御示し下され度し。

②お手紙拝見しました、至極御尤。又実際欠本としては可なり御奮発とも考へます。しかし私の心を動かすには足りませんことを遺憾とします。二冊で二百円なら兎も角、それ以下では割愛する気がありませんから、折角ながらあやまります。あしからず。

三月三日

水谷

鹿田老兄

『京土産』かんじんの所が欠けてをります。残念。古版地誌、昔から余り熱心に集め（ま）せんでしたから、今二三欠本を有してをり、外には何も持合せてをりません。

大毎の高木君（※高木利太）が近頃此方面に漁つてをられると聞いてをります。

③拝復なか／＼御熱心。『女用訓蒙』の一角が五十円で奪ひ合ひの世の中でもあります。ズバリと御奮発、可然と存候。『二代男』が揃へば千両の折紙附、鹿田君葛歳趣。兎も角お送り申します。御覧下されて甘く配合が出来なかつ

たら、お返却下されて差支なし。実は少しも売りたいくない本なれば、寧ろ幸ひであります。但二百円は鏝一文もまかりませんことだけは御承知下され度し。

三月五日

水谷生

鹿田静七様 事下

以上

〔補記〕

今回の拙稿に関連し、明治期の書物を巡る発言として重要と思われる二点の談話もこの紙面を借りて紹介しておきたい。その資料的価値と稿者自身の備忘も兼ねて一部を掲載しておくものである。以下、引用文に関しては、本文での引用同様、適宜改行等を改め、注記等を取捨選択するなどして構成を整えた。

一つ目は当時公立社主であった藤堂卓の談話である。「心齋橋の今昔」と題された談話は昭和三年九月七・八日付の読売新聞に掲載されたものである。藤堂卓については湯川松次郎「大阪書籍業界人物誌」(『上方の出版と文化』上方出版文化会、昭和三十五年)に「氏は青木嵩山堂出身、書籍通信販売業として広く日本全国に目録を発送し大々的に経営されたが、後ち日本橋筋に古本屋町があったころ、日本橋南詰に古本と新本との書店を出し、古書籍組合長を永く務めた。親分肌の人であり、本に関することは何んでも良く知っていて生字引として貴重なものしり博士であった」とある。明治二十三年から四十年までの約二十年間を青木嵩山堂に勤めたようで、その後独立して公立社を経営した人物である。

藤堂卓談「心齋橋の今昔」

江戸時代から明治の二十年頃に亘つて、東都書林の中心地が日本橋から芝にかけての目抜き場所であつたと同様、大阪でも敦賀屋、秋田屋、伊丹屋、河内屋、近江屋など間口の十幾間もあらうといふ、八十軒からの大書林の本家や分家が、心齋橋筋を我もの顔にずらりと軒をならべてみました。お江戸の真ん中日本橋界限で須原屋をはじめ大少幾多の書林が羽振りを利かせてみたのと同様の偉観でした。然しこの心齋橋の偉観も、時世の推移で日露戦争を境とする頃から、或る者は廃業し、或る者は移転するなど散り／＼になつてしまひ、今日では旧幕時代からの老舗として僅柳原一軒を残すのみ。他に丸善とか田中青柳堂など三四の新店に名残りをとどめてゐるに過ぎません。東京とても同じでせう。明治二十年頃の、まだ旧幕時代の面影を多分に残してゐた当時の心齋橋筋、こゝに軒をならべてゐた大書林の模様など記憶に浮ぶまゝを申し上げませう。

元禄時代からの老舗、敦賀屋松村文海堂は『三世相』その他の板元として、又江戸の医書、漢籍などの取次もやり、大阪でも屈指の大書林に数へられてゐた。歿くなられた先代松村久兵衛さん（明治□四年歿）は市会議員にも選ばれたほどの名望家でその頃は一目目（心齋橋通）に大店を張つて居られたが、その後養子の死歿後は商買も廃められてしまつた。今日京大教授の要職にある工学博士松村鶴造（蔵）氏が久兵衛さんの御舎弟と聞いてゐます。

宋栄堂田中太右衛門さん（先々代）は、秋田屋の総本家で敦賀屋に次ぐ大阪での旧家でしたが、芸者を奥さんにする、商売は左前になるやらで、一時はこの老書肆も行先を危まりましたが、今日では幸ひ店も立ち直して、関西の同業界に勇躍されてゐます。別家の多い店で今日繁昌の千葉久栄堂、又間精華堂、服部文貴堂、脇坂書店など何れもここの出の方です。

前川善兵衛さん（心齋橋筋南久宝寺町北入ル）は伊丹屋の本家で、幕府時代に多くの漢籍、生花、茶道、易書などの版元として知られた老舗でしたが、現在は前川合名会社と組織もかはり、主に楽譜などの出版をされてゐます。

山陽の『日本外史』をはじめ、各地名所図会などの板元として、又大阪最古の老書肆として知られてゐる、河内屋の本家柳原喜兵衛さん（心齋橋筋北久太郎町）は、前にも一寸申したやうに、組織は合名会社にかわりましたが、とにかく心齋橋筋に現存する旧幕時代からの唯一の老舗ですが、先代の時分に（明治二十年頃）一時非常な苦境に陥りましたが、当時同業界きつての腕利三木佐助さんに助けられて、その難関を切り抜けたと云はれてゐます。

三木佐助さんはその頃（明治十年頃）はまだ三木書店（河内屋柳原喜兵衛の分家で北久宝町の角にゐた）の一店員に過ぎませんでした。が、主家の苦境時代（明治十五年頃）に親身になつて働いた功により、三國一の婿養子になり、その後中等学校教科書その他の出版に大成功を収めた、謂はゞ立志伝中の腕利きの人でした。今日中等教科書界に覇を称えてゐる大阪東京の両開成館こそ、三木佐助さんの遺業であり、又後身なのであります。近江屋の本家吉岡平助さん（心齋橋筋備後町）は、やはり維新前からの書肆で、先代の頃は取次屋として一番手広くやつて居られました。今日両都の出版界に、その手堅さを謳はれてゐる大阪宝文館（本家）及東京宝文館（分家）、盛文館は即ち近江屋の後身です。

河内屋梅原亀七さん（河内屋喜兵衛の分家で近江屋と同じく心齋橋筋備後町）は、大阪同業界の変種で、大阪日日新聞の前身帝國新聞の経営をやるかと思へば、代議士にも打つて出る、又相場にも手を延ばし、とうとうこの道で大成功を収め、只今は呑気な隠居生活に風月を楽まれてゐるとか。本屋の方は明治三十年頃にあつ

さり廢めて了われました。

嵩山堂青木恒三郎（心齋橋博労町角明治十五年開業）は、私の主家で、当時新興の花形として東京の博文館と並び称せられたものでした。その頃大阪の本屋で東京に支店を張出してゐたのはおそらく一軒くらいなものでした。私はこの店に子供の頃から廿年近くも勤めてゐました。余談に亘りますが其の頃の思ひ出ばなしの一つ二つを申し上げます。

その頃（明治二十五年頃）、私は主に東京の支店に詰めて居りました。お店の二階は大広間になつてゐて、幸田露伴先生はよくここでお弟子達を集めては文学の講義をされてゐました。露伴先生は元來お弟子の少い方でしたが、田村松魚、神谷鶴伴、佐藤露英女史（田村松魚の奥さん）などの方々はよくこの席でお見掛けしました。

露伴先生で思い出すのは、こう申しては今尚御健在の先生に対して甚だ失礼な話ですが、当時の先生の原稿はどこでもあまり喜ばれなかつたものでした。といふのはあまりに堅すぎた為め、今日尚有名な『五重塔』『いさなとり』『風流微塵蔵』四冊などの原稿は、博文館、春陽堂など持ち廻わられた揚句、全部を五十円だから嵩山堂が頂戴したやうな訳でした。

露伴先生や村上浪六先生を初めその頃の先生方の原稿は、主に嵩山堂で頂戴してゐましたが、当時の先生方の原稿料の相場は、浪六先生の百円を筆頭に、露伴先生が三十円、水蔭先生（江見氏）が先づ十五円といふところでした。云ふまでもなくこれは一冊分の稿料で、大部分は新聞小説の切技原稿でしたが、その頃の新聞小説は長くつても三ヶ月九十回、大抵は二ヶ月六十回を普通としてゐましたから、一枚の稿料に見ればお話しにならないほど安かつたものでした。また先生方のお若かつた頃のお話です。

もう一つは、明治初頭、ボール表紙本等を地方行商で商っていた、いろは書房の老主人の談話。拙著『近世戯作の「近代」』でも触れたが、この本文に見える行商における出張広告などの一枚刷には廉価な書物、特にそれには近世戯作のボール表紙本などが掲載されている。廉価な価格設定で、これほどのような利益があるのかと常々ギモンに思っていたところであるが、本談話にはその販売の方法、利潤のあげ方などが記されており、貴重な発言と考えた。大正十五年二月七日の読売新聞掲載である。なお参考までに架蔵の出張広告ピラを次にあげておく【写真3】。

御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲

御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲	御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲	御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲 御寄附地 各書物 御寄附の爲 御寄附の爲
--	--	--

東洋日本橋區船場鶴声社出張員

写真3 鶴声社地方出張販売チラシ

いろは書房老主人三輪逸次郎談「地本行商の思出 東海道を膝栗毛で成金」

地本彫画組合といふのは江戸時代から残存してゐた古い本屋組合の一種で、『田舎源氏』『娘節用』などいふ草双紙類の地本と錦絵とを木版刷りにして出してゐたものです。地本問屋の錚々たるものには、両国の大平、浅草の大川屋、たちばな町の鶴声社、本石町の上田屋、通四丁目の春陽堂の前身市川文事堂などでしたが、つまり版画は石版に、地本は活版に其勢力を奪はれ、地本彫画組合の影は次第に薄くなり、一昨年東京書籍懇話会と名義を変更しましたが、専ら赤本類の普及を取扱つてゐるに過ぎない。けれども東京書籍組合が明治二十年の創立であるに対し、書籍懇話会の前身たる地本彫画組合は遠く江戸時代からあつたのですから、江戸文化の名残りとして何等かの意義がないでもありません。全体むかし貸本屋が幅をきかせていた時は、本屋の勢力は実に微々たるもので、何しろ学校と云つても明倫学校が一つあるきりで、教科書が又四書五経、『前漢書』『後漢書』『文選』『蒙求』『古文真宝』ぐらいなもの。然もその『文選精文』（十三冊）にしても、学校の備え付本で生徒が間に合せていたやうな有様で、四書五経などもわざわざ静岡辺まで買出しに行りましたが、四五十冊も揃へれば充分だつたのです。全く呑気なものでした。それが明治二十四五年頃になると稗史小説類や料理本や囲碁本が盛んに売れるやうになり、就中『明治太平記』『徳川十五代記』なんてものが素敵らしく売れたのです。私はよく行商に出掛けましたが、汽車が新橋、神奈川間にしかなかつた頃は、神奈川から馬車に乗り、藤沢辺で昼飯をたべ、小田原へ行き、箱根八里を一日掛かりで越して、三島辺までも行きました。汽車賃も一哩一錢で名古屋まで行ける様になつても、二円三十五錢でした。その頃の書籍行商です。新聞広告なんかあまり利きませんから、出張広告といふやつをやりました。出張広告といふのは、新聞紙半切位のものに書名と定価を印刷し、「出張中に限り定価五円の書物が一切一円」といふやうな但書をして、一千部なり二千部なり、出張先の

近在へ人を雇つて捌かせるのです。そして自分は宿屋の下座敷に陣取つて、そこへ書物を陳列して坐つている。書物で人気のあるのは『三国志』『八犬伝』『太閤記』『呉越軍記』の類でした。何しろ仲間の取引が其頃一掛でしたから、定価一円のものには正味十銭、そいつを二倍半の廿五銭に売つても大割引でせう。おまけに東京の本屋は品物が揃つてるといふので千客万来。忽ち大儲が出来たものです。宿賃が二十銭、女中への祝儀一円、間代に一円もはずめば宿屋は大喜び。そんな訳で旅費は安いものだし、本は飛ぶやうに売れる。一度なんか静岡に行くのに途中で既に本が品切れになつちまい、再び箱根山を越えて東京へ舞戻り、大慌てでまた静岡へ引返したことがあります。今考へてみると全くあの頃は愉快でしたよ。